

# インドシナ三国の印象

猪 木 正 道

## 1 プノンペン

3年前の7月に、京都大学での講義を終えたカール・レーヴェンシュタイン博士は、米国への帰途どうしても見たいものが3つあると語られた。ひとつは、アンコール・ワットであり、いまひとつはヒマラヤの7,8千メートル級の出々であり、そして最後のひとつは父祖の国イスラエルだ。70歳を越えた博士は、夫人を伴って、これら3つの“偉大なもの”を自らの目でながめ、3つともに満足したというたよりをくださった。その時以来、私にとって、アンコール・ワットの訪問は、きわめて具体的な夢となった。京大の東南アジア研究センターからインドシナ三国を視察して、若い研究者が社会科学と自然科学との現地調査を行なう可能性を検討するよう依頼された時、私の夢はほぼ2年ぶりで実現されたわけだ。

8月29日朝10時半に、時間表どおり羽田空港を飛びたったフランス航空の定期便は、午後3時半にカンボジアの首都プノンペンに着いた。プノンペンの人口は約80万といわれ、人口600万のカンボジアにしてはなかなかりっぱである。空港から市内に向かう通りにはソ連が贈与した工科大学の堂々たる建て物が並んでいる。4年半前にラングーンを訪れた時も、私はソ連が提供した工科大学の壮大きさに強い印象を受けた。ソ連は10月革命以来、科学技術の振興にその国運をかけ、第一級の高度工業国家に成長した。今やソ連は、工業と科学技術教育とによって、アジアおよびアフリカの新興諸国に働きかけているわけだ。

ソ連の援助は、工科大学だけではなく、500のベッドを持つ病院も、カンボジア人に喜ばれていた。近代医学の恩恵は、イデオロギーを越えて、人間の心に訴える。プノンペンの市内を歩いていると“ソ連通り”“ポーランド通り”“ユーゴスラビア通り”など共産諸国の名をつけた通りが少なくないのに驚かされる。これは共産圏の国々からカンボジアに与えられた援助に対する感謝の表われであろう。翌30日の月曜日、私は

“毛沢東通り”の開通式が行なわれた直後、この通りに自動車を走らせた。カンボジア国旗と中国旗とが仲良く林立しているありさまは、この国がアメリカ合衆国と断交した中立国であることを想起させてくれる。

中立国のカンボジアがアメリカと断交したのは、ベトコンを追うアメリカ空軍がしばしばカンボジア領空を侵犯し、カンボジア人部落に死傷者が出たからである。ダレス外交以来、東南アジアに反共・反中国の軍事同盟を組織しようとするアメリカの政策と、あくまで非同盟で押し通そうとするシアヌーク殿下の意図とは、しだいに両立できなくなり、とうとうさる5月に破局を迎えた。カンボジアは前から南ベトナムおよびタイの両国とは国交を断絶しているから、その非同盟政策はどうしても中国（北京）寄りに傾くことになる。北京、プノンペン、ジャカルタ枢軸ということだが、カンボジアの親中国的な立ち場を物語っている。ではカンボジアは、向中一辺倒かというところではない。聡明で聞こえるシアヌーク殿下は、カンボジアが米国との断交により向中一辺倒になるのを防止するため、フランスと日本とに対する交友を深めようと努力している。カンボジアが日本に対する賠償請求権を放棄したのにむくいるため、わが国が贈った農業・畜産および医療の3センターは、小規模ながらいちじるしい成果をあげている。私はプノンペンの日本人会に招かれて、農業センターと医療センターとの開所式を記録したニュース映画を見せていただいたが、シアヌーク殿下とカンボジア国民とのわだかまりのない心の結びつきは、まことに印象的だった。殿下とカンボジア人との間にはヒトラーやスターリンなどが国民に“人気”があったのとは、まったく異質的な関係がある。やはり正統の君主制というものは、暴力や陰謀で権力を横取りした全体主義的独裁者には絶対まねのできない安定性を持っている。

シアヌーク殿下という個性の強い開明君主（殿下はふたたび国王に即位することを拒否し、国家元首の地位にあるが、実質的には君主と違ってよい）を除いて

は、カンボジアの政治は理解できない。非同盟の外交も、政党を解消した内政も、すべてシアヌーク殿下の胸三寸から出ている。一人の君主の意思に依存している意味で、カンボジアの政治には不安定な要素がひそんでいるけれども、殿下の能力と若さから見て、カンボジアが今後少なくとも10年ないし20年間は、従来どおりの発展を続けることはまず間違いはなさそうだ。過去10年間に、国民所得が倍増していること、東南アジア諸国の中で治安が一番良いことなどは、存外知られていない、カンボジアの強味である。隣の南ベトナムが“炎と泥”の戦争にとことんまで苦しめられているのとは、まったく対照的だ。

シアヌーク殿下の非同盟外交が、どれほどすじがねの入ったものであるかは、殿下がアメリカ合衆国と断交した後も、アジア財団の人々を優遇していることから知られる。ビルマはアメリカとは国交を続けているが、アジア財団やフォード財団の代表部に対しては、退去を求めた。カンボジアの態度はまったく逆である。シアヌークの考え方によると、カンボジア領を侵犯した米国政府は許せないけれども、善意のアメリカ市民からの募金によって、カンボジア国政府および国民を援助してくれるアジア財団の活動は、大いに歓迎するというのだ。私はアジア財団の代表部を訪れ、責任者のパニガン氏にもおめにかかったが、カンボジア国中どこへ出かけるにも、何の手続きも必要でなく、安心して活動できると喜んでおられた。一部のアメリカ人は、シアヌーク殿下の親中国的な中立政策をきらい、カンボジアの将来に不安をいただいているようだが、国交断絶という不幸な事態を招いた責任はむしろ米国側にあるといわなければなるまい。

工業化という新興国が最も関心をもっている分野では、ソ連のほか共産圏諸国の援助が目立っている。東ドイツは巨大な代表部を置いて援助しているし、中国も工場や道路の建設をやっている。私は幸いチェコスロバキアの援助による2つの工場を見学することができた。ひとつは砂糖工場であり、いまひとつは自動車のタイヤ工場である。両方とも、大きな敷き地に巨大な建て物を何棟も建てており、チェコ人の技術者たちが半裸で働いていた。あの寒くて乾燥したチェコスロバキアからやってきたのでは、むしろ暑いカンボジアでの生活はまったくやりきれないことだろうと私は同情した。タイヤ工場の方は比較的うまくいっているのに

反して砂糖工場の方は、技術的にも、採算的にも、ゆきづまっているようだ。テン菜糖の技術を砂糖ヤシにそのまま適用したところに問題があるかどうか、私にはなんともいえないが、タイヤ工場の場合も含めて、直接の生産行程以外のところに過大な設備投資をおこなっているという感じは免れない。

共産圏諸国が後進国を援助する場合には、どこでもこれに似た傾向が見られるようだ。ひとつには国有国营方式で、中小企業の段階をとばして、一挙に大規模工場を建設してきたスターリン以来の共産主義的工業化のありかたに問題があり、他面ややもすれば実質よりも外観の方に心ひかれる後進国の要望に、経済性を無視しても迎合しがちな共産圏の対外援助政策に原因があると思う。

この印象は、富士企業の石島氏が中心となって建設した自転車のタイヤ工場を見せていただいた時はっきりした。この工場はチェコのタイヤ工場とは比較にならないほど小規模だが、原材料が不足するほどフルに操業しており、カンボジアの自転車——4人に1人は自転車を持っている——タイヤを自給自足するのに成功した。カンボジア人従業員の作業能率は、今では内地の日本人並みになり、製品の合格率も99.2%を越えている。カンボジアがこの小工場のおかげで年間4千7百万リエルの外貨を節約していることを知って、私は石島氏らのじみな努力に敬服した。採算がとれるまで工場の外観などはあと回しにしたという石島氏のことばは、まことに感銘深いものであった。

日本が援助したタイヤ工場で、カンボジアの男女が規律正しく作業している光景に、私は感動し、「東南アジアにおける日本の将来」という問題に対するひとつの答えを得たような気がした。近く日本の援助によって、紡織工場が建設されることになっているが、これもタイヤ工場と同様に大きな成功を収めるのではないかと思う。石島さんのように、現地に詳しい人が中心になれば、中小規模の工場はきつとうまくゆくだろう。開発の遅れた国が一挙に大規模生産方式を取り入れようとするれば、失敗の公算が大きい。

カンボジア人は、9世紀から15世紀にかけて、アンコールを首都に巨大なクメール帝国を建てた。アンコール・ワットやアンコール・トムのような世界屈指の遺跡を造ったカンボジア人は、潜在的にはすばらしい能力を備えているはずだ。日本の技術者と経営者と

が、彼らの潜在的能力をひきだすのに役立っている光景を見るのはすこぶる愉快である。プノンベンから南西14キロの郊外にある陶器工場を見た時も、私はカンボジア人の能力に感心した。この工場は中国人の経営だが、従業員はほとんど全部カンボジア人である。もともとゴム園の受けザラを作るためにできた工場だが、今日では、大きな水がめ、酒入れ、酢入れ、植木鉢などをどんどん作っている。私は昨年訪れた滋賀県・信楽の陶器工場を思い出した。技術水準も、製品のできれば、カンボジアの工場は、信楽に劣らないように見えた。

## 2 アンコール・ワット

9月1日午後5時、大雨の中を私はダグラスDC3型機でシェム・レアプに飛んだ。1時間後に夕焼けの中をアンコール・ワットとアンコール・トムの上で飛行機はゆっくり施回した後着陸した。遺跡の規模は私の予想をはるかに越えたもので、まる1日ではのぞくのが精一杯であろう。

アンコール・ワットのすぐ前に広々と建てられた平屋のホテル（オーベルジュ・デ・タンブル）に落ちついた私は、すばらしいフランス料理とブドウ酒を楽しみながら、翌日をもっとも有効に費やす方法を検討した。朝8時すぎからはじまるアンコール・トム訪問の遊覧バスに参加した後、昼食を早くすませて、徒歩でアンコール・ワットを見物し、午後2時すぎからの「小回遊」という遊覧バスに乗り込むことに決めた。

翌2日朝早く私のへやを出ると、アンコール・ワットは300メートルほど向こうにそびえていた。なにしろ宗教建築として世界一といわれるだけに、その規模は圧倒的である。このホテルは、どのへやからも、アンコール・ワットがながめられるようにくふうされているらしい。午前のバスはバヨン寺院から始まり、ほぼ源頼朝と同時代に君臨したジャヤヴァルマン7世の巨大な宮殿群を見せてくれた。こんなにスケールの大きい首都を築いたクメール帝国が、アンコール・トムの完成後急速に衰えたのは世界史のナゾの一つだ。大土木工事による民力の疲弊と民心の離反など、いろいろな原因があげられているけれども、じゅうぶん説得的とはいえない。アンコール王朝の貴族たちが信仰していたヒンズー教の信条体系が12世紀末に伝わった小乗仏教によって崩壊したことは、クメール帝国を没落

させた根因であったと思われる。バヨン寺院がヒンズー教と小乗仏教との奇妙な混合を示していることは、思想的混乱を象徴しているといつてよい。ライ病の流行？が帝国の衰亡に大きな役割りを演じたという説もある。もし本当とすれば実に恐ろしい話だ。

小型バスの乗客はほとんど全部前日同じ飛行機でやってきた人々だから、皆すぐ仲よしになった。アルゼンチンからビルマのマンダレーにきているライ病専門医の夫人と一人むすこ、ロンドンから新婚旅行にやってきた弁護士夫妻、デトロイトから世界を一周している老年のアメリカ人など、顔ぶれは多彩だ。私たちがバスから降りると、みやげ物の弓や小刀などを持った子供たちがうるさくつきまとう。750年前にアンコール・トムを建てたクメール人と、はだしの子供たちとの対照は、すさまじいほどである。

昼食後アンコール・ワットへ急いだ私は、ロンドンの弁護士夫妻と一緒にいった。3人で本殿に入っていくと、この寺院の巨大さと同時に、その怪奇さは、想像以上のものであることがわかった。ナガという大蛇（じゃ）の彫刻はどこまでも続いている。石の壁にはよくも飽きないものと思われるほど、同じような彫刻が行なわれており、まったく気が遠くなるほどだ。水利、かんがいの大土木工事によって農業を発達させ、強大な武力により外敵の侵入から農民達を守ったクメール帝国の君主たちは、ヒンズー教の大寺院を建てて自分たちの支配を正当化しようと考えたのであろう。アンコール・ワットは、アンコール・トムよりも半世紀前にスリャヴァルマン2世が建立したもののだけに、小乗仏教の影響はなく、純ヒンズー教寺院である。ロンドンの弁護士と私とは、アンコール・ワットの偉大さに敬服すると同時に、美しさという点では、あまり自分たちの趣味に合わないという点で意見が一致した。

午後の遊覧バスは、12世紀に建てられたプレアークン、タ・プロームなどいくつかの遺跡と、アンコール・トムの貯水池とへ私たちを連れていった。遺跡がジャングルにおおわれたままになっている部分は、人間と自然との格闘の苛（か）烈さを教えてくれる。クメール帝国の盛時には、貴族たちが舟を浮かべて遊んだと思われる貯水池は、今では水牛の楽園となっており、ところどころでカンボジア人が原始的な漁業をやっている。13世紀の初めに東はヴェトナムから西はビルマまでを支配した帝国が、15世紀にタイ人によって

滅ぼされ、さらに400年後フランスの植民地となった歴史を私は想起して、しばらくの間水牛の群れと漁民の姿をぼんやりながめていた。

たしかに750年前の栄光に比べると、今日のカンボジアはみすばらしいかもしれない。しかしシアヌーク殿下の指導下に、カンボジアの近代化は着々進んでいる。アンコール・ワットの西方70キロには、わが国が贈った医療センターと農業センターとが設けられ、カンボジア国民の福祉に寄与している。私はアンコールの遺跡群をじゅうぶんに見るために、少なくとも2週間は必要であることを知った。5年、10年後にはぜひもう一度訪れたいと思うが、そのころまでに、カンボジアの経済開発がどれほど進歩するかを見きわめたいものだ。

翌9月3日早朝の飛行機で、私はプノンペンに帰り、昼過ぎのエア・ヴェトナム機によってバンコクに飛んだ。今度の旅行ではバンコクに立ち寄る用件はないのだが、プノンペンからヴィエンチャンに向かう飛行機はさる6月以来廃止されたので、ラオスへ行くためには、タイを経由しなければならない。ヴェトナム航空は、フランス製のジェット機を用い、美しいヴェトナム服を着たスチュワーデスたちが食事のサービスをしてくれる。サイゴン・デイリー・ニュースという英字新聞をもらったとたんに、私はびっくりしてしまった。第1面の右上部がポッカリ白紙になっているからだ。私は平和なカンボジアから一挙にヴェトナムの戦場に投げ出された感じがした。これほどひどい検閲を行なわなければならないところに、南ヴェトナムの苦悩が現われている。「沈黙は金」とはよくいったもので、千万言を費やしたヴェトナム戦争の叙述よりも、9月3日付のサイゴン・デイリー・ニュースの白紙の方が、はるかに雄弁に南ヴェトナムの難局を教えてくれた。

9ヶ月ぶりのバンコクは相変わらず繁栄していた。第2次世界大戦が終わったころのバンコクは、ラングーンと同じく人口100万に満たなかったのだが、その後20年間にバンコクほど発展した都会はおそらく東南アジアに一つもないのではなからうか。今日バンコクの人口はラングーンの4倍近くあり、シンガポールが斜陽都市化したのにひきかえ、バンコクは東南アジア全体の首都的な地位を確保してしまった。タイが西側と結んで、開放的な経済政策により、着実に経済成長を

とげている結果である。

### 3 ラオス

9月4日午後3時40分に、私はラオス航空のダグラスDC3型機で、バンコクを飛び立った。機内の前方には食糧や家具類が山のように積んである。旅客機というよりは貨客機と呼んだ方がよさそうだ。中部タイから東北タイに移るにつれて、農家が貧しくなってゆくことが、飛行機の窓からよく見える。5時半に見事な夕焼けの中を飛行機は下降しはじめた。やがて巨大なメコン川が右側に見え、次いで左側にも見えてきた。さすがにチベット高原に源を発する世界の大河だけあって、スケールが大きい。私たちの飛行機が着陸態勢に入った時、前方の滑走路に別の飛行機が降りたのを見て、私はヴィエンチャン飛行場の繁忙ぶりに驚かされた。私たちが着陸して、滑走路からわき道に曲がると、すぐまた別の飛行機が下降してきた。シカゴやニューヨークの飛行場と比較しても、次々に着陸する飛行機の間時間的間隔は短いと思われるほどだ。なぜ、ヴィエンチャン飛行場はこんなに忙しいのだろうか。

やがてこのなぞは解けた。私たちの前後に着陸した飛行機はエア・アメリカと呼ばれるアメリカの飛行機で、一応民間機ということになっているが、実際は軍用機である。これらのエア・アメリカ機の任務は、ラオスの右派軍と中立派軍とに補給を行なうことと、左派(パテト・ラオ)軍を偵察することとの2つらしい。パテト・ラオは右派軍や中立派軍に対する陸路の補給を妨害するので、民間機のふりをした軍用機を用いて、アメリカは兵器・弾薬・食糧などを補給しているのだ。左派軍に対する攻撃も時にはおこなうというのだから純然たる軍用機なのだが、ラオスに関するジュネーブ協定を尊重する建て前から、アメリカはあくまでエア・アメリカ機という民間機を用いる体裁をとっている。

しかし、たとえ体裁だけにしても、制服のアメリカ軍人が、正式の軍用機を乗りまわす事態を避けていることは、じゅうぶん意味がある。ラオスの右派・中間派および左派が連立内閣を作って、中立を保つというジュネーブ協定は、今日このような擬制の上に辛うじて守られ、ラオスの不安定な安定が継続されているからだ。

私はラン・サン・ホテルというメコン川に面した大きなホテルに3泊した。さいわい私のへやからはメコン川がよく見えたので、私は翌朝早くからメコン川を矢のように下ってゆく発動機船をながめることができた。人間や荷物を載せた細長い小船は、メコンが東南アジアの大動脈であることを教えてくれる。

ラン・サンというホテルの名は、14世紀に成立したラオス王国の名称からきている。100万頭の象という意味だと聞いた。ラン・サン王国は15世紀にヴィエンチャンを中心とする南半と、ルアン・プラバンを中心とする北半とに分裂し、18世紀にはヴィエンチャンはヴェトナムに支援され、ルアン・プラバンはタイの勢力圏に入った。そして1885年にヴェトナムを手に入れたフランスは、当然ヴィエンチャンを支配することになり、さらに1893年のバンコク条約で、フランスはタイのルアン・プラバンに対する支配権を奪い取り、1904年(明治37年)にラオス全土を植民地化したのだ。このように、国土が分裂して、それぞれの部分が外国の勢力圏に入るというラオス政治の病理は、長い歴史を持っているわけで、それだけにラオスの国造りはむづかしい。

1948年の協定で、フランスはシサヴァン・ヴオン王を統一ラオスの国王として認め、翌年フランス連合のわく内におけるラオスの独立を承認したのだが、ヴェトナムと結んだ国内の左派勢力は、スファスヴォン殿下を中心にパテト・ラオ運動という形で、抵抗を開始した。その後2つのジュネーブ協定によって、ラオスは右派・左派および中間派の三派連立内閣を作り、スヴァンナ・プーマ殿下の下で、中立を保ってゆくことになったのだが、ラオスの国内事情は、列強間の国際協定だけで処理するには、あまりにも多くの困難を蔵している。

まず第一に、ラオスの歴史が示しているように、ラオスの国民形成は一向に進んでいず、国内にはいくつかの遠心分離的な諸勢力が根をおろしている。第二には、東北方では、北ヴェトナムの影響が強く、いわゆる左派の地盤になっている。またメコン川沿いの地方は、東北タイと同じラオス人が住んでおり、タイの一部といってよいほどだ。反共親米を外交政策の基本とするタイ国が、メコン川沿岸地方の共産化を許すはずがない。こうして、ジュネーブ協定にもかかわらず、ラオスは内外の諸条件がからみあって、事実上分裂し

ている。

9月6日の月曜日には、ラオスの国民議会が開かれ、プーマ首相は、新しい閣僚名簿を提出して、国民議会の承認を求めた。名簿はジュネーブ協定に忠実に、右派・左派および中間派から各4名の大臣を出すことになっている。ところが、首都ヴィエンチャンは右派および中間派の支配下に属しているから、左派の大臣は、ただ名目的に名前があがっているだけで、プーマ殿下の名簿は、私がラオスをたった日に無事国民議会の承認を得たが、ヴィエンチャンの政府は事実上右派と中間派とのものである。私はラオスの農村をたずねたかったけれども、ヴィエンチャンから少し離れると、治安が悪いというのでやむなくヴィエンチャンの市内だけを見物することで満足しなければならなかった。人口10万のヴィエンチャンは、一国の首都というには、あまりにも貧弱である。わが国が援助した上水道は、メコン川を水源にしたりっばなものだがまだ利用者は多くない。下水は不完全で、ラン・サン・ホテルでさえ、無数のハエがうなっている。政府の比較的りっばな建て物のすぐ横に水牛がねそべっている光景など、実にユーモアがある。市の中心部にはスイス製の時計や、フランス製の香水、英国製のウイスキーを売る店が並んでいる。ラオスの民芸品を手に入れようとしたが、ラオス製の品は少ない。ヴィエンチャンはまことに奇妙な首都だ。人口10万の半分が中国人だというし、ヴェトナム人もなかなか多い。フランス人がラオスを統治するに際して、中・下級公務員にはヴェトナム人を使い、商業はもっぱら中国人にやらせた名ごりであろう。ヴェトナム戦争による難民も少なくなく、そういう雑多な要因をかかえて、ラオスの国造りはますます困難を加えているようだ。ヴィエンチャン付近の中国人とヴェトナム人とは、タイの東北部に共産主義を侵透させるパイプの役割りを果たしているといううわさもあるが真偽のほどはわからない。

ラオスではカンボジアと同じように中等教育はもっぱらフランスに依存している。ヴィエンチャン市内だけでも、3つのリセ(中・高等学校)があり、たくさんフランス人教師たちがフランス政府によって派遣されている。フランス政府は、先生方の往復旅費・給料はもとより、夏休みにフランス本国へ帰省するために交通費まで全額負担していると聞いて、フランスが自国文化の普及に努める熱意に私はすっかり打たれた。

フランス政府経営のリセのほかに、フランス系カトリックの学校もいくつかあるのだから、ラオスの知識人は、自然にフランス語とフランス文化との中に育つことになる。外国へ留学する場合も行き先はきわめて自然にフランスの大学が選ばれる。こうして、ラオスはフランスから独立した後も、フランス語とフランス文化を通じて、フランスと堅く結ばれているわけだ。

もしわが国が、本当にアジア外交に力を入れ、アジア問題と真剣に取り組むというのなら、東南アジアの国々に日本語による中・高等学校を建て、たくさんの日本人教師を好条件で派遣し、これら中・高等学校の卒業生は、わが国の大学に優先的に留学させることが必要だ。そういう努力を10年、20年と続けてはじめて底力のある成果が期待できる。2、3人の日本語教師を送り込むくらいではとうていだめである。

9月7日の早朝4時半に起床した私は、5時すぎにはヴィエンチャン空港に着いた。6時に飛び立つ予定のラオス航空定期便でサイゴンに向かうためである。空港の待ち合い室にはラオス人、ヴェトナム人、中国人、フランス人、アメリカ人など雑多な人々が見られる。半分くらいはラオスから金塊や洋酒類などをサイゴンに持ち込む運び屋だそうだ。例によって家財道具から家畜まで積み込んだ貨客機に乗り込んで、ヴィエンチャン空港を離陸したのは、朝6時半を過ぎていた。

#### 4. サイゴン

サイゴン行きのラオス航空機は、ダグラスDC4型で、バンコクーヴィエンチャン間を飛んでいるのに比べると、ずっと大きい。私を驚かせたのは、前方に積み込んである子豚や鶏などのかごではなかった。ベルト着用と禁煙のサインが文字ではなしに、絵によって示されていたことは、私にとって初めての経験だっただけに感心した。乗客の大部分が文字を読めない場合、書いたことばで禁煙を求めてもむだである。しかもラオスのように雑多な種類の人間が住んでいる国では、スチュワーデスは何語でしゃべっても役に立たない。だから万人に共通な伝達手段として、絵が選ばれたわけだ。

ところが、乗客の大部分は、ベルトも着用せず、タバコをすうのをやめもしない。スチュワーデスも一向に知らぬ顔である。気象条件の悪い時には、どしどし欠航するせい、ラオス航空にはほとんど事故はない

という。私は飛行機が空飛ぶバスのような役割りを果たしているのに考えさせられた。ラオスでは、鉄道も自動車もとばして、空路がもっとも実用的な交通路になっているのだ。雨雲の中を飛ぶので、飛行機はかなり揺れる。隣の農民風のラオス人は、すっかり酔ったらしく、胃の中のを全部吐いた後、ぐったりしてしまった。

7時40分に、飛行機はサバナケットに着いた。やはりメコン川沿いのタイ国境に近い町で、右派の本拠である。エア・アメリカの補給機がしきりに発着している。アメリカがラオスの右派を助けるため、どれほど本腰を入れているかがよくわかる。隣のお百姓さんは、ここで降りた。私は飛行場付近を歩き回ったが、水牛以外にほとんど何も見当らなかった。時間の関係でサバナケットの町まで行けないのはまことに残念だ。9時ごろに着陸したパクセの場合も同様で、私は何人かのラオス人が降りて、他の何人かの乗客が乗り込んで来るのをながめているほかなかった。このあたりの農民たちの顔は純朴そのもので、子供のころ、私が日本のどこかで見た顔によく似ている。

私たちの飛行機は、サイゴン時間で12時ごろ、目的地に着いた。空からながめたサイゴンの町は、ヴィエンチャンやサバナケットとはまったく比較にならないほど大きく、バンコク級に見える。樹木が多く、建て物が美しい点では、バンコクよりもはるかにすぐれている。空港の税関吏には、密輸専門の運び屋はすぐ見当がつくらしく、徹底的に調べられていた。何しろラオスからサイゴンまでちょっとした金塊を持ち込めば、飛行機の運賃を差し引いても、かなり大きな利益を得ることができるというのだから、税関吏も必死だ。運び屋の中には、サイゴンの税関吏を買収するものもあるらしい。そこで税関吏と運び屋との個別取り引きを防ぐため、乗客の旅券は一括して税関の責任者に渡され、運び屋たちはどの税関吏に荷物を検査されるかを、税関の責任者によって指示される仕組みになっている。南ベトナムでは、中央政府はガタガタしているけれども、税関のような末端の行政機関はまだ健在であることがわかる。

サイゴン空港の建て物はベトコンの手で一部爆破されたことがあり、嚴重に警戒されている。近ごろでは制服・私服の警官が多数配置され、ベトコンもちょっと手が出せないのではないかと思う。空港から宿舎の

ホテル・マジェスティックまでは自動車でも30分もかからない。途中で米軍の施設がいくつかあり、ものものしい警戒ぶりが目につく。

ホテル・マジェスティックはサイゴン川に面したやや古風なホテルで、先日ベトコンにやられたホテル・キャラベラにつぐ地位にある。へやは広々としており、冷房器も電気湯沸し装置もついている。ただ困るのは、しばしば停電することだ。ベトコンの襲撃を恐れて、ホテルのへやはすべてよろい戸を締め切っているから、停電で冷房が止まるとたまったものではない。ホテル・マジェスティックが近くベトコンにやられそうだといううわさは、8月ごろからあったそうだ。近ごろそういう流言が行なわれなれないのは、ホテルの経営者がベトコンに税金を支払ったからだといわれる。このホテルばかりでなく、サイゴンのホテルは、アメリカ軍人、軍属でいっぱいである。なにしろことしに入ってからだけでも、米軍は10万人もふえているのだから、サイゴンがアメリカ軍関係者で満ちあふれるのも無理はない。

サイゴンに到着して、半日たった時、私はアメリカ合衆国が南ヴェトナムを守り抜こうとしている鉄のような意思に強い印象を受けた。南ヴェトナムの海岸線には、ダナン、チュライ、カムラン湾など、アメリカが今春以来建設してきた強大な基地がある。私はそれらの築城工場を見ていないが、実際に視察した人々から聞くとたいへんなものらしい。これらの本格的な補給基地の想像を絶する模様に感心して、アメリカは近いうちに必ず勝つと信じている人もあった。たしかに第七艦隊の制海権を背景にした一連の基地群は、南ヴェトナムにおけるアメリカの立ち場を不敗にしたといっただろう。ラオス国境の山地に設けられたフランス軍の基地ディエンビエンフーのように、ゲリラに囲まれて降伏するというような事態は決して生じないと思われる。そこに1954年のフランスと1965年のアメリカとの根本的な違いがある。

ではアメリカは南ヴェトナムで勝てるかという問題はまったく別になる。海岸線の基地に拠ったアメリカ軍は不敗といってよく、将来さらに兵力を増強して、ベトコンに大打撃を与えることはできよう。B52によるベトコン地帯への連続爆撃も、しかるべき戦果をあげるかもしれない。しかし、たとえアメリカ軍の画期的な増強によって、ベトコンの基幹部隊は、山岳地帯や

隣国に逃げ込むことを余儀なくされ、パート・タイムのゲリラだけが小規模な出撃をおこなうという事態に追いこまれても、ベトコンの戦意はくじけないだろう。その証拠に、サイゴンの停電はひどくなるばかりだ。日本が賠償の一部として建設したダニム水力発電所からの送電線は、ベトコンに切られたままで、南ヴェトナム政府側は修理することさえ断念してしまった。つまりサイゴンの電力事情が悪化の一途をたどるという形で、ベトコンの鉄のような意思ははっきりと示されているのだ。

それだけではない。ホテル・マジェスティックからサイゴン川をへだてた対岸の農村地帯には、毎度花火のような照明弾が打ち上げられている。夜のサイゴンを歩いていると、私は時々対岸からの強力な探照灯によって照らし出された。これはいうまでもなく、サイゴン川の対岸近くに出没するベトコンを討伐するためにアメリカ軍がやっていることだ。したがって照明弾と探照灯は、ベトコンの不屈の意思を立証しているといっても過言ではない。

一方でアメリカ合衆国の鉄のような意思をハダで感じ取り、他方でベトコンの同じく鉄のような意思をハダに感じた私は、すっかり考え込んでしまった。わが国では、アメリカ側が近いうちに撤退するだろうという意見や、逆にベトコンが壊滅的な打撃を受けて鎮圧されるだろうという意見や、あるいは第三者の仲介により早期に停戦が行なわれるだろうという意見がある。ところがサイゴンにいと、アメリカ側もベトコン側も、不退転の決意を固めていることがよくわかり、戦争は残念ながら長引くというよりほかなくなった。

これはまったく困ったことであるがしかしヴェトナム戦争の真相はどうもそういうところではなからうか。もしアメリカ軍がベトコンを押しまくって、軍事的に圧倒的優位に達した場合、アメリカ合衆国が軍事的優勢を背景に、ベトコンとの直接交渉に踏み切れるだけの賢さを持っていれば、ヴェトナム戦争は比較的早く收拾されるかもしれない。ドゴール将軍がアルジェリアの民族解放戦線と交渉して独立を承認した時、軍事的には圧倒的優位に立っていたという歴史的事実はアメリカにとって大いに参考になるはずだ。しかし、アメリカ政府にそれだけの賢さがあるだろうか。

サイゴン空港に着いた時から、私は新聞を捜し求め

た。新聞というものを持たないラオスから来ると、サイゴンの新聞は大きな魅力だったからである。ホテル・マジュスティックを出たところで、私は新聞売りの子供から、待望のサイゴン・デイリー・ニュースとサイゴン・ポストとを手に入れることができた。

サイゴンには2つの英字新聞のほか、いくつかのフランス語新聞と無数のヴェトナム語新聞とがある。市内の新聞売り場には、ヴェトナム語の新聞が何種類も並んでおり、ヴェトナム人たちは熱心に新聞を読んでいる。カンボジア人やラオス人に比べると、ヴェトナム人がどれほど教育程度が高く、知的欲求に富んでいるかはびっくりするほどである。ヴェトナム語の新聞は、南ヴェトナム政府によって発売禁止になったり、廃刊を命ぜられたりしているが、次から次へと新しい新聞が発刊されて、ヴェトナム人たちのニュースへの関心を満足させているようだ。

サイゴン・デイリー・ニュースとサイゴン・ポストとを比較すると、前者の方がやや批判的精神に富み、後者の方がいくぶん御用的だといわれている。双方とも論説欄がなく、ニュースと直接ヴェトナムに関係のない外国関係の評論だけを載せている。検閲によって、白紙の記事が毎日目立つ点では、御用的といわれるサイゴン・ポストの方も同じである。

たとえば、9月8日付けの同紙に載ったロッジ大使の記者会見がそうだ。CBSテレビのキャリッシュャー記者が、ロッジ大使に「大使がヴェトナムに帰ってこられてから気がついたもっとも顕著な変化—よい方と悪い方—とは何でしょうか。」と質問したのに対して、ロッジ大使は1964年7月にサイゴンに去ったところには、ベトコンに勝てるかどうか多くの人々の心に疑問の念があったけれども、ジョンソン大統領が北爆を命じ、米軍を思い切って投入した今では、ベトコンが軍事的には勝てないことは、だれの目にも明らかになってきたと答えている。ところがこのすぐあとで、ロッジ大使が悪い方の変化に言及しようとする、約八行が検閲で削除され、白紙になっている。アメリカ合衆国大使の発言までが検閲されるとは一体どういうことだろうか。

アメリカの大使が南ヴェトナムの情勢の悪化した側面について語った部分を削った南ヴェトナム政府の検閲官は、ロッジ大使の発言を削除することによって、アメリカに対する一種の抵抗を行なっているのではな

かろうか。

こういう疑問をいいてサイゴンの英字新聞を読んでゆくと、思い当たるふしが少なくない。もっともどきつかったのは、9月10日付けサイゴン・デイリー・ニュースの第一面に載った「強姦(かん)か強制売春か?むりやりに3外人の性欲を満足させられた14歳の少女」というセンセーショナルな記事があった。3段のかなり大きな記事を読んでゆくとまったくひどい話だ。ビン・ロンからサイゴンに職を求めてやって来た14才の孤児が主人公である。彼女は親類のもとで月給三千ピアストル(7-8000円)の職を見つけた。ところがホー・チー・マイという婦人が現われて、彼女にもっと楽で、もっと収入のよい職を世話しようと申し出た。

このことばを信用した彼女は、カナ・マン街に連れてゆかれ、子供の世話をする仕事に使うということ、新しい衣服を与えられた。2日後、彼女は不安を感じて逃げだそうとしたが、一室に監禁されてしまった。やがて1人の“大きい”外国人が下着のまま入ってきて、彼女をベッドに押し倒し、性欲を満足させるよう強制した。彼女は泣き叫んで抵抗したが、どうにもならなかった。半時間後、別の大きな外国人がやってきて、同じことをくりかえした。翌日は2人でなくて、3人の外国人が同じことをした。この哀れな少女がもはや役に立たないことを知って、ホー・チー・マイは彼女に古い時計と五百ピアストルを与えて、市場まで連れて行き釈放した。そこで彼女は直ちに警察に訴え出たというのである。

私はこのいたましい記事を読んで、敗戦直後の日本を思い出した。当時米兵が日本の婦女子に暴行を加えた場合、新聞はアメリカ軍人のことを「大きな外国人」と書いたものだ。こんな記事が新聞の第一面にデカデカと載るところに、南ヴェトナムの上から下までのあらゆる階級の人々の胸中にくすぶっている“反米”感情が表現されているといつてよい。むしろ南ヴェトナムの国民が大部分反米的だということではない。それどころか、北から共産主義の支配をのがれてきたカトリック教徒やその他の反共産主義者の中には、理性的には大いに親米的な人々が多いただろう。アメリカ軍がもし撤退するようなことがあれば、その瞬間に、南ヴェトナムはベトコンの支配下に入ることはだれでも知っている。ベトコンの支配が、結局は共産党の独裁を意

味していることも、南ヴェトナムでは常識だ。だから、共産党の一党独裁をきらい、恐れるヴェトナム人たちは“親米”的であるばかりか“向米一辺倒”でさえある。

ところが、理性的には“親米”であり、“向米一辺倒”でさえあるヴェトナム人たちも、感情的には、時々、否しばしば反米的になりかねない。アメリカが南ヴェトナムに本腰を入れ、南ヴェトナムの“自由”を守るため、少なからぬアメリカ人の生命と自由と幸福とを犠牲に供する決意に感謝する理性的な気持ちと同時に米軍将兵たちに対する名状できない反感が強くなる。ここに南ヴェトナムの悲劇があり、またアメリカの悲劇があると私は痛感した。

さきに私はサイゴンで、アメリカの鉄のような意思と、ベトコンの同じように不屈な意思との2つから深い印象を受けたと述べた。かんじんの南ヴェトナム政府はキー將軍を首班として、たしかに厳存しているのだが、アメリカとベトコンの双方の不退転の決意にはさまれて、影がうすいという感じだ。しかしサイゴンにいた4日間、新聞を読むごとに、私はしだいに強く、南ヴェトナム政府の存在を意識するようになった。

第一に新聞を検閲しているのは南ヴェトナム政府だし、第二に政府の高官やその夫人たちの汚職と腐敗とを非難・弾がいているのも南ヴェトナム政府だからである。また第三にアメリカが南ヴェトナム政府やその地方行政機関の頭を越えて、直接ヴェトナム人や少数民族に援助物資を与えたり、そのたの交渉を持ったりすることに対して、南ヴェトナム政府が極度に警戒的なのも注目値する。日本からながめていると、アメリカのかいらいのように見えるかもしれない

が、南ヴェトナム政府は、ベトコンに対しても、またアメリカに対しても主権と独立を守ろうとして一生懸命なのである。

9月9日のサイゴン・デイリー・ニュースは節電が一層強化されることを報じ、内閣官房長官、電力局長らの記者会見を載せている。その中で、電力の事情が悪化した原因として、ダニム水力発電所からの送電が不可能なことのほかに、アメリカ軍、その他アメリカ政府関係者の大量入国のため電力需要が急増したと、電力関係技術者の動員により、発・送・配電設備の補修がますます困難になってきたことの2点が特筆されていたのは注目された。アメリカが南ヴェトナムを軍事的に援助しようとする決意を強化すればするほどそして南ヴェトナム政府軍の動員が徹底すればするほど、ヴェトナム国民の生活は、それだけ圧迫をこうむることになる。これは南ヴェトナムのジレンマであると同時に、アメリカのジレンマにはかならない。

アメリカ側とベトコン側とが、あくまで戦うという決意を堅持している現状のもとでは、ヴェトナム戦争が早期に終わる見込みは立たないというのが、3泊4日のサイゴン滞在を終えて、9月10日の午後6時にエア・フランス機でサイゴン空港を飛び立った私の印象であった。フランス航空機はインドとパキスタンとの戦争を避けて、セイロン経由でやってきたため、時間表よりも4時間も遅れてサイゴンに到着した。私はこの飛行機を待つ間、サイゴン空港に続々と着陸する米軍輸送機をながめながら、この戦争は長びきそうだという感じをますます深くしたしだいである。

(1965年9月15日)